

胸を張らせてくれる福音

ルカ13:10~17 / 李正雨師

ルターの宗教改革の時代のことです。1521年8月、ルターは自分の同僚メランヒトンにこのような手紙を書きました。「大胆に罪を犯しなさい。しかし、もっと大胆にキリストを信じ、喜びなさい。」ルターの同僚メランヒトンは、ルターの改革の大きな助力者でした。彼は言語に敏感で優れた学者として、ヴィッテンベルク大学で文学とギリシャ語を教えていた教授でした。そのため、ルターの聖書翻訳やアウクスブルク信仰告白などの著述活動にも積極的に参加し、ルターもしばしばメランヒトンの助けを求めました。しかし彼は、宗教改革を導く者としては、足りない面がありました。ルーテル神学校の教授であった徳善先生は、メランヒトンについてこのように述べています。「メランヒトンは学者としては一角の人物であったが、改革を牽引していく運動家としての才はなかった。改革の先頭に立った者は、何か一つを改善しようと思えば、あちらを立てればこちらが立たずという状況にすぐ直面する。ルター不在の時にあって、決断の分かれ道に立たされることも、しばしばであったと考えられる。そのメランヒトンにルターはこういう手紙を送っている(マルティン・ルター、岩波新書93p)。

ルターがメランヒトンに送った手紙、この手紙の中で「大胆に罪を犯しなさい。しかし、もっと大胆にキリストを信じ、喜びなさい」という言葉が出て来ます。これは、罪の恐れによって宗教改革を円滑に導くことができないメランヒトンに対するルターの促しでした。この世に生きている私たちは、罪を避けることはできません。しかも、私たちが信仰によって行うことの中にも、私たちが思いかけないいろいろな罪が入っているかもしれません。だからといって、罪を犯してはならないといって、私たちは何もしないということも良いことではないでしょう。神様の哀れみを信じて、神様の赦しを信じて、私たちは、私たちに与えられた働きを大胆にしていかなければなりません。これがルターが話した「大胆に罪を犯しなさい」という言葉の意味なのです。

今日の福音書では、イエス様の奇跡が書かれています。ところが、イエス様はこの奇跡を行われる過程で律法を破られます。これによって、イエス様はご自分に反対する人々から非難されます。しかし、これはイエス様が計画なさったことであり、イエス様の言葉によって、反対者たちは恥を、群衆は真理を得るようになります。何が起こり、イエス様が何を教えたのかを調べてみましょう。今日の福音書10-11節の言葉です。「安息日に、イエスはある会堂で教えておられた。そこに、十八年間も病の霊に取りつかれている女がいた。腰が曲がったまま、どうしても伸ばすことができなかった。」

イエス様はある会堂で教えておられました。その日は安息日であり、会堂には体が不自由な婦人がいました。彼女は腰が曲がっていましたが、彼女の病名が何なのか、何がその病気の原因であったのかは、書かれていないのでよく分かりません。しかし、確かなことは、彼女はこの病の霊によって18年間も苦しんでいたということです。イエス様はこれを御覧になり、彼女を呼び寄せて、「婦人よ、病気は治った(12節)」と言われます。そして、女の腰に手を置かれると、腰がまっすぐになり、彼女は神様を賛美しました。イエス様は誰も治すことができなかったので、18年間も苦しんだ人を自由にしてくださったのです。しかし、このことをみんなが喜んでいただけではありませんでした。イエス様の癒しを指摘する人がいました。14節の言葉です。「ところが会堂長は、イエスが安息日に病人をいやされたことに腹を立て、群衆に言った。『働くべき日は六日ある。その間に来て治してもらうがよい。安息日はいけない。』」

会堂長は、イエス様がなされたことが安息日の律法を破ることだと指摘しています。そして、群衆に癒されるためなら、平日に来ることを要求します。出エジプト記20章9-10節には、こう書かれています。「六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるからいかなる仕事をしてはならない。」会堂長は出エジプト記の言葉を引用して、イエス様がなされたことは正しいことではないと語っているのです。一見すると、この会堂長の言葉も一理があります。安息日の律法を守ろうということ、このために平日に会堂に来なさいということ。これらは、かなり合理的な方法であると見えるでしょう。さらに、このことを語った人は、その会堂を管理して導いている会堂長でした。ですから、律法と会堂長とい

う立場を取った彼の言葉は、十分に説得力がありました。

しかし、イエス様はこの会堂長のことを「偽善者（15節）」と言われます。これは、彼の言葉はもっともらしく聞こえますが、彼の本音ではなかったということです。彼の意図は、人々の前でイエス様が律法を守らなかったことを暴き出すことでした。だから、会堂長はイエス様に向かって話さず、群衆に向かって律法のことを語ったのだと思います。群衆にイエス様の過ちを刻ませようとしたのです。このようなことは、宗教改革の時にも起こりました。当時のローマ教会は、ルターの宗教改革を阻むために、表では宗教裁判を、裏では民心を扇動しました。常にルターのことを人々に告発し、ルターが分裂を起こしていると言いました。教皇庁はルターの相手としてヨハン・エックという神学者を送り、彼は、ルターが異端とされたヤン・フスに従っていると主張しました。このようなことによって、ルターの支持率は落ち、ルターは破門されました。ルターの後援者であったザクセン選帝侯フリードリヒ3世がいなかったら、ルターは殺されることになったかもしれません。

今日の福音書の会堂長が謀っていることも、これと同じだと思います。群衆を通してイエス様の過ちを咎めようと思ったのです。それで彼は、イエス様のしたことで腹を立て、群衆に向かって安息日の律法について語ったのです。しかし、イエス様はこれを知っておられ、律法を叫ぶ会堂長の偽善を指摘なさいます。15～16節の言葉です。「しかし、主は彼に答えて言われた。『偽善者たちよ、あなたたちはだれでも、安息日にも牛やろばを飼い葉桶から解いて、水を飲ませに引いて行くではないか。この女はアブラハムの娘なのに、十八年もの間サタンに縛られていたのだ。安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったのか。』」

ユダヤ人には、ミシュナーという本があります。この本について簡単に言うと、律法に関わる賢者たちの言い伝えをまとめた本、つまり、法解釈が書かれている本です。この本には、荷物を載せていない牛やろばは、安息日にも飼い葉おけから解いて、外に引き出せることはできると書かれています。これは牛やろばに水や餌を食べさせるためですが、移動できる距離は、約1キロくらいでした。このように、律法は、家畜についても緩く適用されました。しかし、今日の福音書での会堂長は、同じ安息日の律法を語りながら、イエス様の奇跡は、律法を破ったことだと言います。イエス様が会堂長に「偽善者よ」と言われたのは、このためです。家畜にも緩く適用される律法を、人に厳しく適用したからです。イエス様を責めるために律法を用いたからです。

イエス様はこのような会堂長に、「安息日であっても、その束縛から解いてはいけなかったのか」と言われます。家畜のためにも、安息日に水を飲ませるのに、18年間も苦しんできた女を癒すことは、何らかの理由であっても、延ばしてはならないことでした。それでイエス様は、安息日に彼女の病気を癒され、彼女は18年間の苦難から逃れることができることになりました。これは、福音というものが何なのかを、私たちによく示してくれる言葉だと思います。福音は束縛するものではありません。福音は解くものであり、私たちを自由にしてくれるものです。私たちの胸を張らせてくれるもの。これが私たちに与えられた福音の力です。

今日の福音書の女は、イエス様と会堂で会いました。これは、彼女も安息日をよく守ってきたことを示すことだと思います。彼女は、律法に従って安息日を守って来ましたが、律法から何も得られませんでした。むしろ家畜よりも厳しく治められただけでした。しかし、イエス様の福音は違いました。彼女は福音によって癒され、救いを得ることができました。私たちの信仰、私たちが目指しているのは、この福音です。この福音は、すべての状況から私たちを自由にし、いつも私たちの胸を張らせてくれるのです。ルターの言葉のように、大胆に罪を犯し、もっと大胆にキリストを信じるようにさせるのです。だから皆様、すべての状況から大胆になってください。イエス様はいつも私たちを導いてくださいます。17節の言葉のように、福音に反対する者は、みんな恥を受けます。しかし私たちは、イエス様がなさった数々の素晴らしい行いを見て喜びます。罪の意識、ストレス、心配、恐怖は、もはや私たちを束縛することはできません。イエス様が私たちのために十字架につけられたからです。この信じられない福音のメッセージが皆様と共にありますように。イエスの十字架があらゆる状況から私たちを自由にしますように、主の御名によって祈ります。アーメン